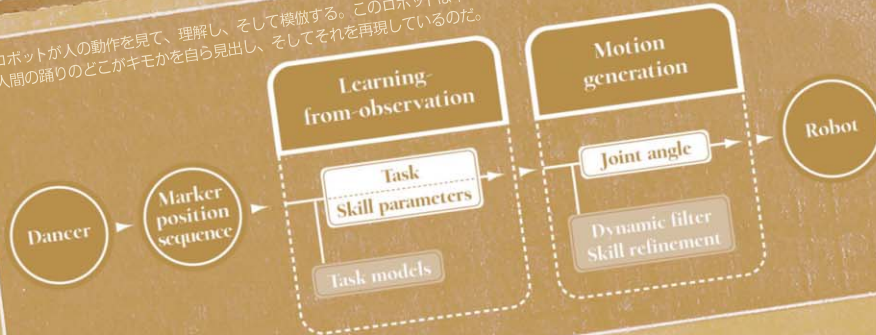
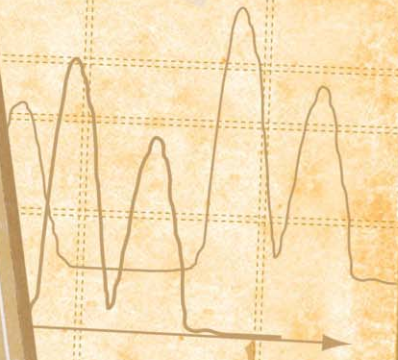


## 機械行歩足二型問及於踊山梯磐津会

ロボットが人の動作を見て、理解し、そして模倣する。このロボットは単に「踊りのような動き」をプログラムされているのではない。人間の踊りのどこがキモかを自ら見出し、そしてそれを再現しているのだ。



Speed



## 「アジア情報社会コース」誕生

— 東大を様々な言語が飛び交うコスモポリタンに —

### 田中明彦 教授 インタビュー

学際情報学府の新しいコース「アジア情報社会コース」が、政府の概算要求を通過し

2008年10月のスタートを目指して準備中である。

このコースの中心となっておられる田中明彦先生に新コースのこと、また、新刊のご著書について伺った。



**Q** 「アジア情報社会コース」新設の意味についてお話しください。

アジアでは今、30年前はもちろん10年前と比べても、全く比べ物にならないような大きな変化が起きています。これは政治、経済、文化など様々な面で言えることですが、我が情報学環が扱っているところの情報流通、情報創造といった「情報」に関する様々なことがアジアの中で爆発的に起き

ているということを見逃すことはできません。また、今までも学環学府では日本にもアジアにも関係することをたくさんやってきていますが、今度「アジア」という名前の付いたコースを作ることによって、東大が現実的にアジアで起きていることに一層焦点を当てるという姿勢がはっきりすると思いますし、大変エキサイティングなことだと思っています。

**Q** 新コースのポイントについてお聞かせ下さい。

いろいろなタイプの人に入ってもらいたいので、世界中の多くの国に合わせて10月1日入学の予定で準備を進めています。英語の能力はTOEFL、それ以外の能力はアメリカの比較的標準的な試験であるところのGREの点数を出してもらい書類審査をして入学者の選考をします。大きな特色は、日本語が十分にできなくても英語さえ大学院教育のレベルの能力があれば修士号も博士号も取ることができることです。東大としては、いわゆる人文社会系、文科系で初めての試みになります。これによって日本語が相当にできなければならないということで東大や東大の情報学環に来ることを諦めていた人たちにも門戸を開くことができるようになりますし、日本人でも、英語で授業を受けたいという人にはぜひチャレンジしてほしいと思っています。アジアの人はもとより、あらゆる国の人が一緒に、アジアで今現在起こっている情報社会の変化をつかめるために研究をしていく場にしたいと思います。

日本の大学なのにどうして日本語でやらないのかという意見もありますが、今アジアにおける共通言語は、よし悪しは別として英語です。EUの会合は加盟国全部の言語に通訳をつけてやりますが、ASEANの会合はみな英語が使われ、これによって相当会議が簡便になっています。ですから、別に英語さえできればいいという

ものではないのですが、アジアの中でのコミュニケーションをよくするために英語を使うことは、現実としてやむを得ないことだと言えるのではないかと思います。

情報学環は発足当時から新しい試みということで、それまでの通常の伝統的な大学院に嵌らないような多様な人たちを集めてきましたし、留学生も他の研究科と比べて非常に多かったのですが、このコースができることによって、本郷も駒場もそこに集う人の幅が広がり、赤門の脇にできる福武ホール周辺など様々な言語が飛び交うコスモポリタンのな雰囲気的空間になったらいいなと楽しみにしています。そもそもUniversityというものは一国だけのものではなくて、Universalに近い、Universalなものじゃなくちゃいけないと思うんです。

**Q** 新刊「アジアの中の日本」を出されましたが…

私の研究は国際政治の理論に加えて、アジアの国際政治なので、政治という面から見て現在に至るアジアが、過去30年間ぐらいの間にどんな変化を遂げてきたかということをしてできるだけわかりやすく書いてみたいと思いました。

30年ぐらい前のアジアはそこら中で戦争をしていて、実際に行くことができない国が多く、抽象的でとても遠い存在でしたが、この30年の間に冷戦が終わり、いろいろな国の政治関係が正常化し、経済発展は爆発的に進みました。少なくともアジアの都市の中では似たようなライフスタイルを持っている中間層のな人が非常に増え、若者で言えばポップカルチャー、老人で言えば少子高齢化といったように、そこにはある種の共通の文化、共通の課題、テーマが増えてきましたし、まだいろいろな問題がありますが、政治の面でも非常にアジアというのに近い存在になりました。アジアの国の首相や大統領がみんな集まるサミットなんて30年前は考えられないことでしたが、今はどこかの指導者が就任すると、すぐサミットやりましょうという話になるのが当たり前になってきました。こうしたことを見ていて、私は端的に、やや単純化して言うと史上初めてアジアが一つになりつつあるという感触を持ち、政治面からこの間のプロセスを描いてみたいと思いました。この本はだいぶ前から少しずつ調べたことをまとめて作っていた本なので、今度のコースと直接重なるわけではありませんが、読んでいただくと、政治という面から、この「アジア情報社会コース」が必要になるバックグラウンドがよくわかるのではないかと思います。



「アジアの中の日本」  
田中明彦著 / NTT出版

## 第一回学環顧問会議、開催される

11月26日(月)情報学環本館6階にて第1回情報学環顧問会議が開催されました。学環顧問会議は、学環学府という新しい組織をよりよいものにしていくため、学外の方からご意見、ご提案をいただく場として設置されたアドバイザリー・ボードです。委員には、各界の第一線で活躍の12人の方に就任をお願いしました。

当日、委員の皆様におかれましては、お忙しいところにもかかわらず、座長をお願いした長尾真国会図書館長(元京大総長)をはじめ、12人中11人の方のご出席をいただきました。

### 委員の方々(五十音順)

- 青柳 正規 氏: 国立西洋美術館館長
- 一力 雅彦 氏: (株)河北新報代表取締役社長
- 伊藤 滋 氏: 東京大学名誉教授、早稲田大学特命教授
- 大塚 陸毅 氏: 東日本旅客鉄道(株)取締役会長
- 樺山 紘一 氏: 印刷博物館館長
- 篠塚 勝正 氏: 沖電気工業(株)取締役社長兼CEO
- 長尾真 氏(座長): 国立国会図書館長、元京都大学総長
- 中村 桂子 氏: JT生命誌研究館館長
- 樋口 恵子 氏: 東京家政大学名誉教授、NPO法人高齢社会をよくする女性の会理事長
- 日高 敏隆 氏: 京都精華大学客員教授、京都市青少年科学センター所長、元滋賀県立大学学長
- 福武總一郎 氏: (株)ベネッセコーポレーション代表取締役会長兼CEO
- 山本 雅弘 氏: (株)毎日放送代表取締役会長

会議では、第一回ということもあり、まずは委員と教員の紹介。続いて吉見学環長と坂村副学環長から、それぞれ情報学環の組織と現状、ならびにCOEプロジェクトの現況についての説明があり、その後、フリーディスカッションとなりました。

短い時間であったにもかかわらず、委員の皆様すべてから、驚くほどの確かなご意見とアドバイスをいただきました。委員の皆様の言葉を今後の学環の運営に反映し、よりよき研究・教育環境をつくりたいと教員一同、意を新たにしました。

本会議を組織するにあたっては、昨年7月頃から1年半越しの準備をし、今回、こうして素晴らしい会合に結実しました。委員の皆様初め、準備段階からお世話になりました関係者の皆様にご心より御礼申し上げます。(学環長・吉見俊哉)



## 社会情報研究資料センターの第一期リニューアル

情報学環附属社会情報研究資料センター(センター長:馬場章)は、大学本部による新規教育研究事業(高度アーカイブ化事業)の

採択に伴い、現在大幅な改装を実施中である。11月には第一期の改装工事を終え、閲覧室のリニューアルと機能強化が行われるとともに、貴重資料の公開とユビキタス技術の連携を視野に入れた「展示室」(2007年度末一般公開予定)が新たに設置された。社会情報研究資料センターは、新聞研究所以来の長い伝統を持つ組織であり、全国からの利用申請に応じているが、展示室の設置により、今後はセンターのみならず情報学環が保有する貴重な文化資源の公開を行うとともに、5力年計画で先進的なアーカイブの整備に注力していく。(特任助教・添野勉)



## 日韓米シンポジウム開催

11月16日、東京大学鉄門講堂にて国際シンポジウム「<アジア>から考える メディア研究ネットワークの挑戦—東アジアにおける社会情報の新展開 The New Trends of Socio-Information in East Asia」(東京大学創立130周年記念事業)が開催された。開催の意図は、東京大学とソウル大学の教員が共同して、学際的に、情報社会の活性化、グローバル化を語ることにあるが、今年はニューヨーク大学の教員も参加し、さらなる議論の国際化を目指すこととなった。

第一部「メディア社会のソシオポリティクス」では、Biella Coleman准教授と姜尚中教授による報告、Kang Nam Jun准教授によるコメントが、第二部「コミュニケーション/身体/メディア」ではAram Sinnreich客員准教授、Youn Sug-Min准教授による報告、吉見俊哉学環長によるコメントが、第三部「東アジアの情報環境」では、Lee Joong-Seek准教授、田中秀幸准教授の報告、Ted Magder教授によるコメントが、第四部「総括討論」ではSeung Gwan Park教授による総括コメントが提示され、活発な議論が展開された。

またこれと平行して、翌17日には、学生間の国際交流の充実化を目指して、日韓米の学生によるワークショップが開催された。(准教授・北田暁大)



## 東京大学創立130周年記念事業 写真展「本郷零時3分」開催



©photo dialogue: Tomoki HIROKAWA

情報学環コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム(デジタルコンテンツ創造科学演習)制作・マーケティングシミュレーション展示・出版プロデュース(責任教員:馬場章教授)は、10月22日～11月8日に、『「本郷零時3分」展—写真家と学生のダイアログから—』を、工学部2号館展示スペースにて開催した。

本写真展の最大の特徴は、日常の裏側を卓越した感性で切り取る写真家として注目されている広川智基氏と本教育プログラム履修生が、自らの感性や研究・技術を通して学び合い、プロデュース作品として結実させ、それら表現することをねらいとしている点である。馬場章教授および本教育プログラム修了生の濱田美菜子氏(現・A super rabbit プロデューサー)の指導のもと、企画、資金調達から、会計、作品撮影・選定、展示、出版、広報・宣伝、展示評

価、資金回収に至るまで、理論的かつ実践的に学習した。

価、資金回収に至るまで、理論的かつ実践的に学習した。

タイトルの「本郷零時3分」には、二つの意味が込められている。第一は、真夜中の長時間露光撮影による、日中では見ることのできない深淵の中の東京大学のもう一つの顔。第二は、創立130周年を迎える長年の伝統や日本の最高学府という東大ブランドを削ぎ落としありのままの東京大学だ。



©photo dialogue: Tomoki HIROKAWA

このようなコンセプトのもと、撮影された約300点の作品の中から22点が厳選され、展示のみならず、写真集やポストカードにも収録された。会期中は、2,409名の方々にご来場いただき、大盛況のうちに終了した。(特任研究員・藤原正仁)



©photo dialogue: Tomoki HIROKAWA

## ニューズレター 20号記念によせて



ニューズレター『学環学府』は、季刊発行で今回20号を迎えました。もはや紙の時代ではないと廃刊の話もありましたが、手にとって表紙デザインと上質紙の質感を楽しむ、最近3ヶ月間の活動を振り返るには最適な媒体ではないでしょうか。過去5年の表紙モチーフをキーワードで並べると、「赤ちゃん」→「ストーンサークル」→「河口洋一郎教授CG」→「戦時ポスターと錦絵、かわら版」→「ロボット設計図と錦絵、かわら版」となり、どの表紙にも委員会とデザイナーの熱い思いが込められています(表紙デザインを絵葉書にするというアイデアも...)。編集会議では、学環学府の活動を厳選して4ページに当てはめていくのですが、毎回ニュースやイベントが目白押しで、学環の活動レベルの高さを感じる次第です。20号を迎えて本ニューズレターはデザイン・内容とも他部局からも賛辞をいただくまでに成長しました。余裕があれば、特別号として「学府教員の趣味百選」を企画するなど、活動報告とともに楽しめるものに育みたいと念じています。履歴は学環ウェブサイトPDF参照。(企画広報委員長・深代千之)



## 原島博教授 東京都技術振興功労表彰受賞

原島博教授が、10月1日、平成19年度東京都技術振興功労表彰を受けた。

東京都技術振興功労表彰は、科学技術発展のため尽力し、科学技術の進歩、産業の発展、都民生活の向上に貢献し、かつ20年以上継続した功労顕著な者に授与される。すなわち、社会的・経済的・文化的に卓越した貢献が都民生活の向上に結びついていることが認められたことによる表彰であって、その受賞理由は以下の通りである。

原島博教授は、世界に先駆けて通信分野と人工知能分野を結び付けた「知的コミュニケーション」なる技術分野を開拓し、それを顔画像処理などの「感性コミュニケーション」へと結びつけ、心理学などの幅広い関連分野に影響を与えてきた。この新しい学問分野の確立は、電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーショングループや日本顔学会の発足という形で結実した。さらに、ヒューマンコミュニケーションを中心とするユニバーサルコミュニケーション技術は、総務省においても今後の情報通信の重要技術として位置づけられている。現在、一般市民の科学技術への期待は、単に物質的な豊かさではなく、心の豊かさに向かいつつある。この先駆的な研究は、人に優しい情報環境の構築を目指す産業技術の基盤となっており、都民生活の質の向上へ結びつくものである。(准教授・苗村健)



## 中国・清華大学 新聞と伝播学院 と国際交流賞書締結

11月28日、情報学環は中国の清華大学新聞と伝播学院と国際交流賞書締結をしました。調印式は、清華大学の李希光学院長と吉見学環長との間で、和やかな会合の後執り行われました。

清華大学は、学生たちの研究水準がたいへん高く、全学的にも東大との連携を重視しています。情報学環も、今後も東アジアを中心として、一層教育と研究の国際化を推進していきます。

## 情報学環ホームカミングデイ 開催

11月10日、工学部2号館にて、平成19年度学環・学府ホームカミングデイが開催された。吉見学環・学府長による開会挨拶の後、「学環・学府生、この一年」と題し、この一年の学生関連活動が学生自身により報告された。これは、卒業生・修了生が「帰って来たいと思う場」という主旨のもと、学生の視点から学環・学府の「今」を振り返る企画として、制作展やThinking Forestプロジェクト、教育部における活動など様々な報告があった。続いて「学環・学府・教育部を巡る過去・現在・未来」と題し、須藤修教授のモデレータのもと、森村久美子氏(学府1期生、現・工学系研究科講師)、胡曉蕾氏(教育部OB・学府5期生、現・リクルート)、加島卓氏(旧社情研研究生、現・北田研D2)といった多様な顔ぶれの卒業生・修了生による座談会が執り行われた。深代企画広報委員長による第1部閉会の挨拶の後、入試説明会ともども恒例となった第2部の「学環・学府めぐり」、および第3部の懇親会において、当日あいの天気ですべて多くはない数の参加者にも関わらず、学環・学府に関わる多様なメンバーによる非常にホットで活発な交流が夜遅くまで行われた。こうした企画等を通じて今後ますます学環・学府の過去・現在・未来のメンバーが集う場が広がっていくことを願ってやまない。(准教授・鈴木高宏)

## 河口研究室 @ASIAGRAPH2007



世界に対抗できるアジア独自の文化を育み、発信してゆこうという目的のもと、10月11日～14日、秋葉原のUDXビルディングにおいてASIAGRAPH 2007 in Tokyoが開催された。CGギャラリー、各界の第一人者の方々によるパネル講演、最新テクノロジーの展示、学会としてのテクニカルセッションなど、盛り沢山の4日間であった。

河口洋一郎研究室では全員が一致団結して、CGとダンサーが共演する

「ジェモーションダンス」によりオーブ・ニングレセプションを演出し、また、「先端技術展」に研究の最新成果を多数出展するなど、ASIAGRAPHにおいて牽引的創造性を発揮した。1万3千人を超える来場者に恵まれ、子連れの方々、コスプレ姿の若者、おじいさんおばあさん、アーティストの方々など、研究者のみならず多くの方々との交わりの機会を持つ事が出来た、非常に印象深い大会となった。(河口洋一郎・米倉将吾)



## 「DiGRA 2007」開催

日本デジタルゲーム学会(会長:馬場章教授)は、9月24日～28日、デジタルゲームの国際学術会議(DiGRA 2007)を、東京大学本郷キャンパスにおいて開催した。世界各国からデジタルゲーム研究者・開発者355名が集結し、ゲームの心理的・生理的影響、ゲーム産業のビジネスモデル、ゲームの応用利用などに関する基調講演、シンポジウム、研究発表が行われた。

コンテンツ産業各種イベントが連携する「JAPAN国際コンテンツフェスティバル」の一環として開催されたこともあり、当日は政府・報道関係者も多数来場し、注目の高さを感じられた。日本では初めてとなるこの学術的な取り組みを通じて、日本のデジタルゲーム研究と産業が更なる発展を遂げることが期待される。(特任研究員・七邊信重)

## Arcade Games and Video Hardwares and Soft



## メル・プラッツ 公開研究会のお知らせ

2007年7月にスタートしたメル・プラッツは、メディア表現やリテラシーについて、実践者や研究者たちの幅広いコミュニケーションを生み出す「広場」の創成をめざしています。(准教授・水越伸)

●メル・プラッツ次回公開研究会  
2/23(土)14時～18時(東京大学本郷キャンパス)  
<http://www.mellplatz.com/>  
問合せ:2007@mellplatz.com

## TFプロジェクト開幕

11月15日、Thinking Forest (TF) はフィナーレを迎えた。「工事壁をメディアに」、image-forest、keyword-forestと続く試みは学内外に大きな反響を呼び、学環の課題と可能性を見せてくれた。福武ホール工事壁の解体を前に、14日クローリング・イベントとして福武ホールの工事現場見学会と振り返りの会を行った。日韓米シンポジウムで来日されていた先生方や学環院生たち総勢50名で最後のステッカーを森に配置した。振り返りの会では、学環院生や先生方、修了生の方々のサロニック空間をいかに創出するか、2次元の壁では表しきれなかった私たちの知の連関をどのように残していくかなど、TFの今後、学環の今後をも見据えた議論が提起された。本プロジェクトにご協力頂いた皆様に心より感謝申し上げます。(水越研D1阿部純)



## 中尾研留學生 世界で8人の奨学金獲得

中尾彰宏研究室所属で、マレーシアからの留學生である、コー・スーヒンさん(Soon Hin Khor)さんが、情報セキュリティ専門家を認定する国際的なNPOのISC2(アイ・エス・シー・スクアド)からの奨学金受給者に選ばれた。受給者全世界8人のうち、日本からは本学の方のコーさんだけで、2007年11月1日付けの毎日工業新聞朝刊にニュースとしてとりあげられた。

今回の受賞は、インターネットの情報セキュリティを向上させる仕組みの提案とそのプラネットラボ上での検証というコーさんの博士課程のテーマが評価されたことによる。研究費と学費補助として年間1万2500ドルが与えられた。競争力の高い外部奨学金の獲得は、学生個人のインセンティブを高めることは勿論、優秀な学生の研究を世界に紹介すると共に、情報学環の社会的貢献を大きくアピールする良い機会であると考えられる。(准教授・中尾彰宏)

## 博士学位授与

8月24日、中村直行さん(わが国の代替医療情報の研究)と並木志乃さん(地域コミュニケーションを円滑にする評価指標の開発と評価)、学際情報学府論文博士第一号金相美さん(社会関係資本としての縁故主義的ネットワークとサイバーコミュニティに関する一考察-韓国社会を事例に)、10月12日には大瀧友里奈さん(都市生活者の意識変革に必要な「水リテラシー」と

いう概念の提唱)、以上の4名に博士の学位が授与された。(括弧内は論文名)



## 本年日本バーチャルリアリティ 学会論文賞を受賞!(07.9.20)

寛康明('07.3博士課程修了)、飯田誠、苗村健、松下光範: "Tablescape Plus: インタラクティブな卓上映像シスター"、日本バーチャルリアリティ学会論文誌、11/3.377--386(06.9)

## 学環本館&社研前道路改修

東京大学創立130周年記念事業の一つ「知のプロムナード」整備の一環として情報学環と社会科学研究所前の通りの改修が行われた。でこぼこ道はシンプルな石畳に変わり、ベンチも据えられた。これを記念して、『情報学環と社会科学研究所との交流会』が11月20日、社会科学研究所会議室で開催された。普段は管理上、施錠されている扉が、交流会の間は開錠され、隣同士の学環と社研とが文字通りつながった。



## 人事異動

### 教員

・採用・

8/1	大石岳史	特任講師
10/1	須見徹太郎	特任教授
10/1	荒牧浩二	客員准教授
10/1	山田政寛	寄附講座教員

### 職員

・配置換(転出)・

11/16	学務係主任	関口 健
-------	-------	------

(国際系国際企画グループへ/日本学術振興会ロンドン海外研究連絡センターへ派遣)

・配置換(転入)・

11/16	学務係	小暮 馨生
-------	-----	-------

(教育・学生支援系キャリア・サポートグループより)

学環学府 Number. 20

Interfaculty Initiative in Information Studies  
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies  
The University of Tokyo

東京大学大学院情報学環・学際情報学府 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

発行: 2008年1月 編集委員: 深代千之・林香里・吉海智晃・前波奈保子

e-mail: [news@iii.u-tokyo.ac.jp](mailto:news@iii.u-tokyo.ac.jp) URL: <http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/>

今号の  
表紙

池内研究室では、ロボットによる「見まね学習」を研究しています。表紙のロボットは、タスクモデルという考え方に基づいて人間の動作の構造をきちんと理解し、舞踊を行っています(この研究は、東大池内研・産総研・川田工業の共同プロジェクトです)。かわら版は情報学環所蔵小野秀雄コレクションより かわら版19. 火事No.01「るいせう道しるべ 上」、12. 政争No.66「節分」、11. 対外関係No.10「異国人の図(仮)」